

# 日本の技術生かして

## 「建築」「地質」の援助が必要

最後の1人帰国

トルコ大地震にAMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）が派遣した緊急医療チームで、最後まで現地に残っていた調整員の大家豊彦さん（32）＝広島県廿日市市＝が11日、関西国際空港に帰国した。大家さんは国際協力事業団（JICA）トルコ地震防災研究センターに勤務した経験を持つトルコ通。「緊急医療支援が一段落した今後、建築や地質など、日本の技術を生かした援助が必要」と提言する。

大家さんは大学卒業後、青年海外協力隊の水泳教師としてシリアに3年間赴任。その後、JICA調整員としてトルコで4年働き、今年6月に帰国したばかり。今回はAMDA調整員として、医師らの活動場所や宿泊先の情報を集めた。緊急医療チームが帰国した後も、今後の国際協力などについて調査を続け、計23日間、滞在した。



大家豊彦さん

# トルコで AMDA 救援報告

現地の様子について、「トルコは日本より地震が少ないため、地震に対する人々の恐怖は強く、余震を恐れて屋外で寝る人がほとんどだった。『大きな余震が〇月〇日起こる』など、阪神大震災で飛び交ったのと同じデマに、パニックが広がっていた」と、情報の混乱ぶりを振り返った。

今回の地震で、現地では簡単に崩壊した建物のもろさが問題になった。「トルコにも耐震基準はあるが、守られていない建物が多かった」。海砂によるコンクリートの劣化が指摘され、弱い地盤に高い建物が建ち被害を広げた例もある。国際協力の最前線で働いた経験から、大家さんは「建築基準や耐震工法、地質工学など、日本が技術面で協力できる分野も多いはず」。

【野原 靖】

### 募金受け付け

毎日新聞社会事業団の救援募金は、「トルコ地震救援金」と明記して、左記へ郵便振替、現金書留で送金していただくか、直接ご持参下さい。なお、物資の受け付けはいたしません。

〒530-0825 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「トルコ地震」係（郵便振替00970・9・12891）